

3/1「組織」破防法と闘う集会 報告集

〈目次〉

1. 奥西救援会からの報告
 - 「組織」破防法攻撃と我々の態度
 - 「組織」破防法下の支援戦線の建設について
 - 権力の攻撃に確実に反撃せる
2. 各被害団アピール
3. 連帯アピール、その他

〈主催〉奥西救援会

〈後援〉共産主義者同盟

(全日委員会)

スローガン

- ①、各団体の同志、テロル「破壊戦」で密偵組織を襲撃し、警察の大進入。
- ②、政府警察の暴行を激しく「爆弾」攻撃を続ける。
- ・「組織」破防法は「組織」攻撃の前提と非合法攻撃を許容する。
- ・政府警察の他はテロル「爆弾」を、手上げ連帯の勇気と支援戦線を築く。
- ・自治の組織的攻撃を準備し、即ち非合法闘争を防止する。
- ・社会主義、資本主義、一党独裁、独裁体制を破壊する。
- ③、政府警察の反革命目的を暴露し、武装攻撃をさぐる支援戦線を築く。
- ④、各団体の同志が門前町警察との対決に勝利し、警察の「統一闘」を継続する。

「神話」 徳防法政界下へ支援戦線をついて

Aの武装斗争を拡大し、軍部対派を組織せよ。

武装斗争が拡大している。60年代後半のいわゆる「ゲハ様と火まじしの美力斗争、大衆的武装闘争とは比喩も
のにならぬ、爆弾と銃」を中心とした武装闘争が継続
されている。暴徒赤軍の諸君による「あさま山荘」銃撃
戦や、「二二」数年前にわたる爆弾斗争を受けつづけた徳防合
図である。爆弾や銃母、その行使にまつ、個々の経路や
談話を政府マルジョブジャーナリからのぐんるもつづつて居
ない。又、遅れた人民、をふるい立たせ、勇気を取り、
とじらざるブルジョアマヌスロツクのうちたも居るまじ
くない。それは文字通り人民の権力を維持するもので

あり、人民の政权を樹立するこのためのものである。60
年代後半の政治的阻止策と闘争、ピン・ケルツ斗争が、それ
を通じて、国家権力の暴力機構をフロロコ、その反人民
性をさらけ出して、それとの対決は決して平和的にならな
るということを示すものでもあった。とりわけ日本
共産党の緊急マヌスの純化、以つ主体に対する武装闘争
という反革命性。にもたつたる未だ人民の多くに、い
つかは……という甘い幻想。社会党に対する暴力性。そ
れから人民の革命的エネルギーを引き出すのに大いに貢
献した。我々は又のこのことを正しく評価するものがある。

だから、この一時代、我々の舌をなぐさるるにも、こ
ろころにはあれ、ついで来た諸君は、その当時たりと
り暴げておれば、革命的武装斗争に賛成していた。い
や、正しくは、反対はしてはなかつた。と、ついで、一定
の評価をこま。だが、今日ばかり。明かな当時とは
違う評価を下さなければならぬ。武装斗争の開始は、
任意に決めた。テロリスト的決意に満ちたものではない。
この点に因ることは、右はマルジョブジャーナリ、左はコ
ミタラ「二二」新左翼と組織されている部下四派まで異句
同音の「評価」を下すことあり、我々は彼らと決して許し
ておいてはならない。なぜなら武装斗争の不可避性
は敵の侵略と革命の必然性、非暴力を前提とした革命
進行体制の崩壊、それ故の革命要求、ならんすく地上の
革命組織を維持した国家に対する侵略であり、たりかりなき
わの攻撃であり、及び味方のめを境とする革命斗争組
織の崩壊、共産党の覆の覆れたこの政治的目標はありん
ない。我々は、ゲトナムを中心とする解放戦争の臨

の過渡、それが武装斗争拡大の理由である。一階級力、
からずんば死の根拠である。

武装斗争は従来の合法時代の斗争とは異なつた闘争形態
あるように内戦と外戦、連続が必要である。誰ぞも
何も方だ、い、こくたにこそ共産隊に打ち勝つては
のとは敵からつたのである。敵の弾圧をく知ること、
く分知すること、味方の量と質を正しく評価すること、
公然と非公然を正しく使いわけること、技術を知する
こと、計画にづく計画を立てる事、これがついでに、軍
反対派の知るべきはな、全く知らず、こりたりの
ある。

の組織的後重と対決し、攻撃を活動に持込せよ
と我々が自由戦線をついたこの一環をになら、まある。攻撃
活動がそこ入れを主としていた時代は、共産隊、敵
への横激を組織するが任務であった。それは今でも大
な事である。だが、マヌスカー一体になつていくら「凶
犯」など、ア、ナ、ナ、ナ、ナ、ナ、ナ、ナ、ナ、ナ、ナ、ナ、
事は余りに明らかなのである。または、敵との暴力的
的対決の条件は、積してつ、敵力の「上げつたこと
対する怒りは消してこける。これら人民の生活を組織して
いかなる斗争もありたい。まことに武装斗争をやる
共産隊が何故存在するのや。それだけとなく何故に、
継、拡大する事が可能なのや。このことについて、敵力
とびそのエロコネには全く未知である。こうして人民の
怒りがなくて武装斗争があらざるや、か、か、か、か、か、
これである。「水」と「水」にたとえる。もた、武装
闘争を支持し、支持する人民の魂の目をくして野郎た
ある。人は、もちろん組織された人民であり、戦士と野
志的、組織的に行わなければならない。一人一人に全
ただで、犯人インテリゲンシア、なるべきを看らる時
である。善悪や情、怒りだけでは多様性、多様性、の
る。自由戦線の任務は、自由戦線の任務は、自由戦線の
り、政治的斗争と対決する敵の獲得、組織性、自由戦線
成にある。ムソク、か、か、か、か、か、か、か、か、
心算でありたい。何故か、敵力の誘惑する野郎と、
れこけるのだから。

我々の組織建設は公然と非公然・合法と非合法の安全なる
る団体としての組織建設として担われなければならない。なり
う戦争論、革命戦争論は、帝国主義の敵部に於ては党衆
体が政治的・軍事的に包圍されることを前提とするのである。
陸の市場に陥った魚が無力な様に、敵に包圍されに陥り
や戦闘場と無能力に等しい。それはつまり、これも一人
非合法の口を犯すまじきと見做し、銃棒ににらめつけられ
れば命の危険を冒すこととなる。赤軍派は政
治と軍によって陸に打ちあげられたのだ。

同志諸君、赤軍派はみずからその前段階蜂起への道を
選んだのだろうか？ 否、絶対になん少くとも赤軍派の
大半は前時の再現を恐れていた。70年から71年にかけて
の彼らの革命戦争と革命路線の再編、改組問題はそれ
端的に表現してははいか、彼ら自身は自らの党
を改組することに失敗したのである。統一赤軍は壊滅し
た……果してそうか？、我々は我々の身の内に現在に
至る迄の赤軍派をみる事ができるだろうか。我々は
その改組に失敗し、赤軍派を生みだし分派した。

我々も胎内から奇型児を生み出したのである。我
々も油断すれば、すぐさま、統一赤軍と同じ運命がま
ているのだ。我々が好むと好まざるにかかわらず、だ
んごばの上での赤軍批判によつてはその失敗をくり返す
ことは絶対にならないとは言えないのだ。同志諸君、わ
が胎内から生み出した赤軍派をみてみたまえ。彼らは自
からあの道を選んだのでは絶対ではない。

同志諸君、我々は認証によつて革命をやろうというの
ではない。具体的組織建設として政治的に革命を保證
しようとしているのだ。我々は日常的に権力と対峙して
いる限り、日常的に彼らの土俵上に解体されるのだ。権
力の目的は我々を狭い領域へと追いつめることである。
権力の攻撃の環が、また我々の公然・合法領域を侵襲し
ようとするのをわれはよく判るだろう。我々はどんなこ
とがあつても非合法・非公然領域に追いつめられはな
らない。非合法・非公然の領域を強化し固括しそして大
に合法・公然領域を守りぬき拡大をねがはならない。その
一領域として我々R.G.被官団は、権力に弾劾された前線
でR.G.裁判を争いぬいていくのである。R.G.裁判の位置
はそれ以下をもたない。敵の攻撃に対しては更な

る戦いと組織の拡大である。我々は区々、準備しなけ
ればならない。

我々は赤軍派の教訓と共に我々自身のR.G.革命の内
より多くを学ぶことができる。我々は、このかたの革命
革命家のように、危機感を叫び、赤軍派に対しては政
府主義とだけしか反撥をせず、いつか水に化けして
し、彼らと闘いを理解を争うべき立場にはない。我々
も、我々はそのだけの血債を、第一次R.G.として
七一年一〇月の赤軍の来によつてその代償を支払って
きた。一般的に銃東戦にたえようというのは、無政府
主義であり、赤軍派への逆行である。我々は必ず勝利
せねばならぬ。決戦必勝の心で闘わねばならぬ。

蜂起し臨時革命政府樹立へむけて第一階建設のため
に赤軍派の敗北を教訓化せよ。
同志諸君、世界革命戦争の勝利のために
死んでい
ろ。

(10)

(11) 4.28 被官団マヒル(1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) (11) (12) (13) (14) (15) (16) (17) (18) (19) (20) (21) (22) (23) (24) (25) (26) (27) (28) (29) (30) (31) (32) (33) (34) (35) (36) (37) (38) (39) (40) (41) (42) (43) (44) (45) (46) (47) (48) (49) (50) (51) (52) (53) (54) (55) (56) (57) (58) (59) (60) (61) (62) (63) (64) (65) (66) (67) (68) (69) (70) (71) (72) (73) (74) (75) (76) (77) (78) (79) (80) (81) (82) (83) (84) (85) (86) (87) (88) (89) (90) (91) (92) (93) (94) (95) (96) (97) (98) (99) (100)

同志諸君、我々諸君、我々は革命を闘う意志であ
る軍代の権力、党内、党外、党外、根拠から固く我々
の組織的組織主義を拒否して、大難をくぐりぬける。
断絶として「組織」的防法を研究し、従来の非合法
建設をくぐりぬける。

(12)

権力の家族攻撃=転向強要に屈せず 更なる前進を



本集會に結集された同志諸君。

連日赤軍の諸君の斗いにもられるように、すでに階級斗争の最先端は、リアルに殺すか殺されるかの時代に突入している。そのことを確認すると共に、我々がはっきりと見ておかなければならない点は、従来の、カゲキ派=「キチカイ」という差別的な保守加担するだけのキャンペーンから更に、「キチカイ」を生み出した家族に対するサラツ物キャンペーンと進行している。マル新は、各紙ごとって活動家の暴行を暴露し、封建時代における「お家断絶」、一族皆死罪ぶろく市民社会から家族を分断することによって革命家の転向を強要している。思想・信条の自由はあるか、カゲキ派の家族であれば一切のマルツヨリ民主主義的諸権利でさえもはく奪され、結婚・就職は差別され、警察に24時間監視されるのである。さらに資本主義の補助的に生み出される階級斗争を、何みしら親のそだて方に向題がある、という形で陰険にしようするのである。

我々は、このような権力・マル新一体となった反革命攻撃を断固として許してはならない。マル新は、「我こそは民の声」とばかりに正義の味方づらをするのであるが、朝霞事件を例にとるまでもなく、正義のために命をかけて闘うことなど一度もなく、権力の代弁者にすぎぬ事を公然と暴露していくべく、断固たる新南社に対する糾弾斗争を準備しなければならぬ。(従来、我々はこの方面では決定的に不充分)にかしななら同志諸君。このような攻撃にくじけてはならない。未解放部落民は「部落出身」というだけで市民社会から分断され、ことあるごとに差別の中絶庄に仕込まれ、母なお部落完全解放に向けて叫び抱いている。在日朝鮮人民は、日常的に抑圧・同化・追放体制の下にあかれ、それに公然と抗議する者や、送還—暗黒裁判—死刑という弾圧を受けている。我々はようやく未解放部落民や在日中朝人民の、苦闘の道の一歩を歩みだしたにすぎない。日帝のアツア侵略—反革命戦争遂行体制再編強化に向けた、入管法、被防法、保安加担攻撃に我々は体系的非合法党建設で答えていかねばならない。「組織被防法体制下の革命斗争の勝利のカギとは、未解放部落人民の斗いと結ぶ(=戦時的階級的内外Mと固く結ぶ)することによって非合法党を強固に建設していく事(在日中朝アツア人民の斗いと結ぶ)に他ならない。

同志諸君。昨秋斗争は、従来の新左翼と輝ばれてきた潮流の実践的な分裂をもたらした日和見主義的翼は、権力に屈服し、武装斗争の問題に答える事ができずに、単にあるままの組織にリビエト型組織として意味付与し、テロル・破壊戦・密集遊撃戦を貫徹し、武装蜂起の正道を歩くのではなく、権力が日和見主義者のために用意した道、なつては日共が歩み、革マルが整備した道をありみだしているのである。

同志諸君。革命的左翼と我が非合法党、軍事組織の任務は重文であり、今春、日帝の侵略—反革命戦争遂行にむけた沖縄自衛隊派兵、保安加担、入管体制破壊の諸斗争を弾頭として武装斗争として実現し、革命的左翼の首領として我が非合法党をとうちきたえよう。

我々の斗いは、戦前の日共以上の「死刑、無期徴役」を生み出さつつある。しかし我々は非合法党を堅持する限り決して敗北はしない。何よりも本日結集された革命的な諸君がいるなごり斗いは必ず勝利するだろう。

同志諸君。更に前進を、前進を、「生きるも地獄、死ぬも地獄」、斗いだけが解放の道なのだ。

11.19斗争被告 野村 貴